

「ルドン ー秘密の花園」展

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2018.02.08～05.20

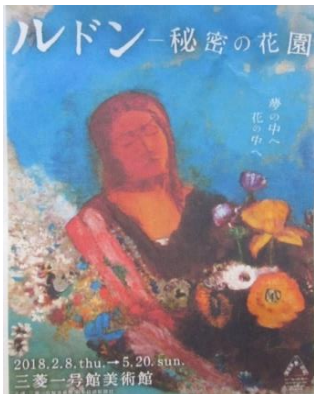
本展覧会「秘密の花園」は、「ドムシー男爵家の装飾画」の他、フランス象徴主義の「ルドン」が生涯描き続けた「植物を描いた約90点の作品」に焦点を当てて世界観をひもとく企画で、世界で初めての試みとしての開催である。

「オディロン・ルドン」(1840～1926)は、フランス・ボルドー生まれで20歳時に植物学者と知り合ってから顕微鏡下の世界に魅せられるようになった画家で、鮮やかな色彩を用いるようになったのは50歳を過ぎてからとされている。

画伯の19～20世紀初めに活躍したユニークな画業は、印象派巨匠「モネ」らが活躍する時代にあって異色ともいえる芸術家で、**見えないものを描き出すという幻想的な内面に目を向けた作風**は新鮮で多くの人を魅了している。

「ルドン」が描く植物は、リアルなのに実際には存在しないもので、むしろ眼を閉じると浮かび上がってくるような“夢の中の絵”であるとされている。

オディロン・ルドン 《眼を閉じて2》 1900年頃 油彩/カンヴァス



画伯は、“眼という画題”に対して特別な思いを抱いており、好んで描いたテーマの「目を閉じた人の顔」は、夢見る人、または夢の象徴であるとされている。

本作品は至上最大級の「パステル画」で、夫人をモデルとしたとされる水面らしき地平の彼方で、眼を閉じた巨大な姿を描いたもので、観る者の心に染みるような温もりを感じさせる幻想的な色彩が溢れているため、現代人から見ても新鮮で多くの人々を魅了させている。

オディロン・ルドン 《グラン・ブーケ（大きな花束）》 1901年パステル/カンヴァス



本展の最大の見どころの一つの「パステル画」で、美術愛好家「ドムシー男爵」が、画伯に注文をした城館の食堂の装飾画で、本作品は当美術館が所蔵している。

城館の装飾画の中心をなすこの作品は、注文時は暖色を主調とする絵を望んだが、あえて青色の花瓶に色とりどりの花を描いて神秘的な作品に仕上げたものである。

現在確認されている「ルドンの装飾画16点」のうち「15点」は、「オルセー美術館」が所蔵し、今回、大型装飾画シリーズが一堂に会して展示される貴重な機会である。